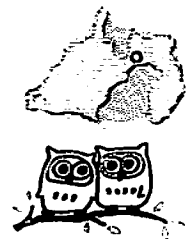


⑧ 敬けん  
清く美しく輝くものに心をひかれ  
清らかな心をもつ心柄を育てる。

●学習指導要領の内容③(3)  
楽しいものに感動する心や人間の力を超えた  
ものに対する畏敬の念をもつ。

大いなるものの思つかいを言こう

心のノート  
68~71



## 9 忘れられない誕生日

◆楽しいものを見たり、聞いたりしてすばらしいと感動したことはありませんか。  
夏休みに入ってまもなく、父がぼくにこんなことを言った。

「耕平、夏休みにお父さんとふたりで富士山に登ってみないかい。」

富士山は、日本一の山であるし、どんな景色が見られるか興味もあったので、

「いいよ。富士山は一度行って見たかったんだ。」

そう答えると、  
「じゃあ、約束だ。ちようと来月は耕平の誕生日もあるし、そのころ行こう。」

と父が言った。

ぼくは、(早く行きたいなあ。しかも、父さんとふたりきりなんてうれしいなあ。)と思い、わくわくした。

「ようし、絶対に頂上まで登るぞ。」

誕生日前日の朝、父とぼくは富士山頂をめざして家を出発した。富士宮駅に着くと、バスに乗りか

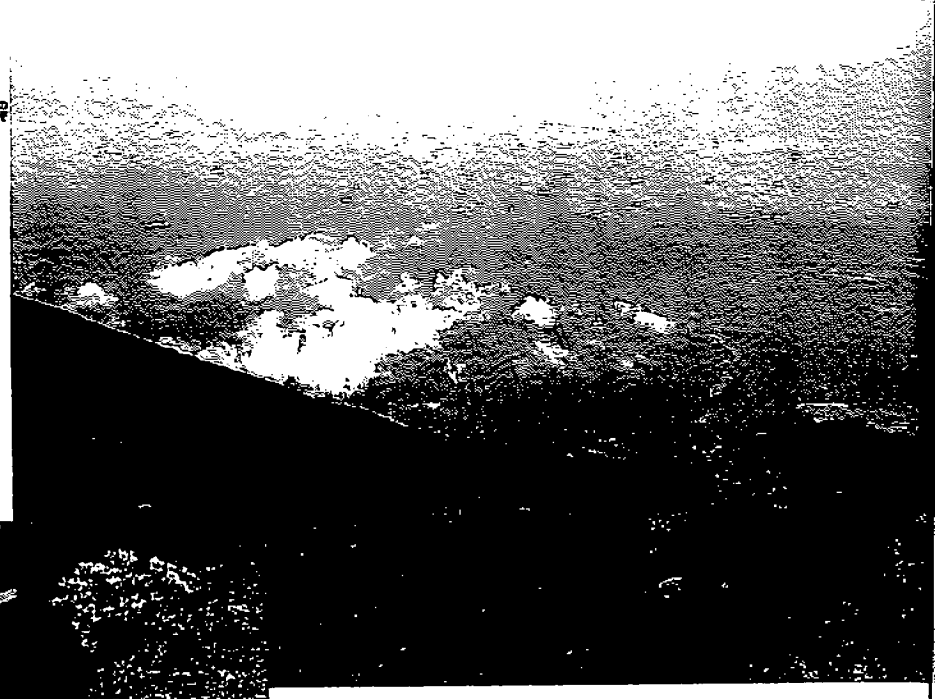
えて新五合目に向かった。新五合目に着き、バスから降りると、八月というのに空気がひんやりとしていた。ぼくは自然の中の

静けさに、何か特別なきん張感を覚え、大きく深呼吸をした。いよいよ山頂をめざして歩くのだ。

富士山表口五合目から三十分ほど歩くと、二千四百九十メートルの新六合目に着いた。展望台から見下ろすと富士の広い裾野が広がっている。左には、伊豆半島、駿河湾が見えた。海岸線を追っていくとその先に、ぼくが住んでいる三保半島が見えた。ぼくは、改めて富士山から見る景色の美しさに満足していた。

しかし、六合目からは、ゴツゴツとした岩が多く、けいしやもきつくなってきた。油断をすると、足をふみはずしそうだ。父とぼくはゆっくりと歩いた。

八合目を過ぎると、今度は前へ歩こうと思ってもなかなか足が前に出ない。さすが日本一の山と言われるだけある。簡単には登らせてはくれない。息を整え歩いていると、小さな白い花が地面をほうようにさいていた。ぼくは、厳しい富士の気候に負けず、けん命に生きる花に、力をもらった気がした。



▼下界を臨む

▼フジハタザオ

新五合目から出発して六時間。ついに、九合目に着いた。今日の夜は山小屋へ一泊し、明日の朝、頂上まで来光を見て下山する。ほっとして眼下に目をやると、夕日に照らされ、むらさきがかかった美しい雲海が広がっていた。なんとこの美しさだろう。ぼくは、時間のたつのも忘れて、どこまでも続く雲海に目をうばわれた。しばらくして山小屋に入ると、父がこう語りかけた。

「富士山は霊峰富士とも言うんだ。それはね、富士山は最も天に近い山、雲の上の世界と言われ、人々は山の神が住んでいると信じていたんだ。火を噴く恐ろしい山、神聖な山、そして、姿・形の美しい山として、人々にあがめられてきたんだ。」

ぼくは話を聞きながら、今日苦勞して登ってきたことや景色の美しさを思い出した。

「明日は早いぞ。ゆっくり休んで来光を見よう。」

父に言われ、ぼくはふとんに入った。

夜中の三時。父に起こされ、急いで準備をして出発した。外の空気は、はだをさすように冷たい。いよいよ九合目から頂上へちよう戦である。歩き始めると、今までの登りの中でも、いちばん息が苦しくなった。体が重く、(もう、限界だ。)と心がさげんでいた。そんなとき、父が、

「三千六百メートルまで来たよ。この鳥居を過ぎれば、あと少しで頂上だ。」

と声をかけてくれた。(よし。絶対に登るぞ。)と自分に言い聞かせ前へ進んだ。最後の鳥居をくぐり、登りきったその先に「富士山頂上奥宮」と書かれた社があった。ぼくはうれしくて、

「やったあ。雲の上の頂上にやっと着いたんだ。」とさげんだ。ぼくの胸は満足感でいっぱいだった。

そのときだ。東の空が赤く染まり始めた。しばらくすると、雲海のはるかかなたに太陽が顔を出した。

次の瞬間、一筋の光がすうっと富士山に向かってきた。まるで、光の道のようにだった。登山者たちの大きなどよめきのあと、しばらくの間、だれも一言もしゃべらなかつた。ぼくは、人を簡単に寄せ付けない富士山の威厳をはだて感じた。そして、堂々として日本一の山「富士山」に、心かあらわれる思いがした。

父を見ると、手を合せている。ぼくもこのおごそかなふん囲気に、自然と手を合させた。

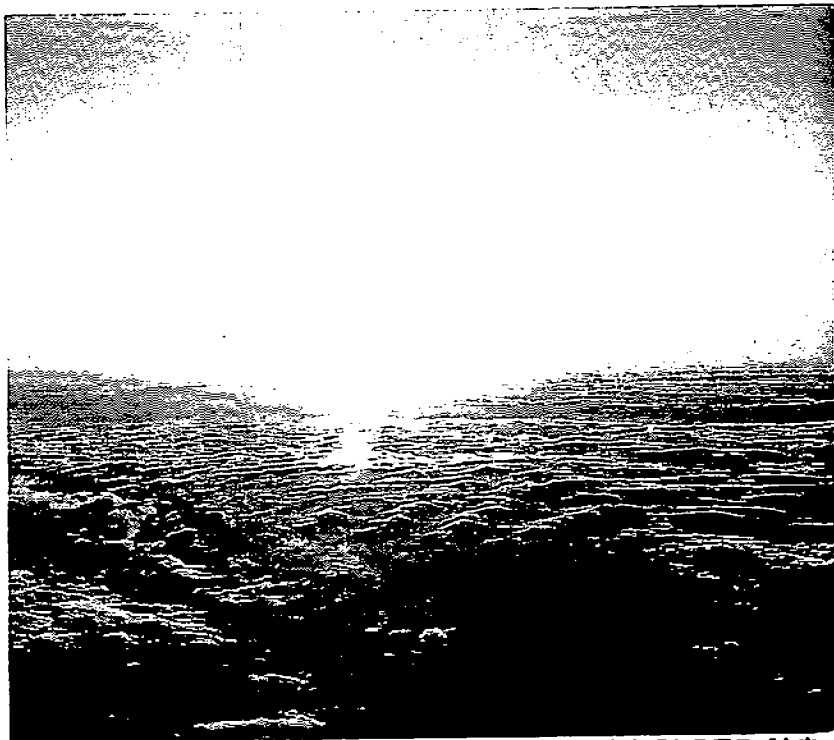
「耕平、どうだ。富士山は、いいだろう。耕平の誕生日に、どうしても一緒にここから日の出を見たかったんだ。」

ぼくの胸にこみ上げるものがあつた。

最高の誕生日になった今日の日を、ぼくは一

生忘れないだろう。

心に感動を与えるものに出会ったことがありますか。



▲ 富士山頂から見るご来光

①あがめる 身いものとして、大切にする。  
②おごそか 威厳があり、近寄りがたい様子。